

武蔵野の落ち葉堆肥農法

所沢の自然と農業 稲村 洋二

3月9日(木)三芳町伊東農園伊東社長の講演会が新所沢公民館で開催されました。自然と農業サークルのメンバーを中心に60名の参加者があり、三富地区で受け継がれてきている落ち葉掃き農業の日本農業遺産を経て世界農業遺産認定取得への取り組みを聴講しました。この地域での落ち葉を利用した伝統農法は江戸時代の柳沢吉保の新田開発から引き継がれ今日に至っています。

落ち葉堆肥に適しているのは落葉広葉樹の枯葉です。針葉樹の枯れ葉は堆肥化するのに時間がかかります。コナラやナラの落ち葉を熊手でかき集め、それを集積所で踏みこみ、落ち葉に混ざっている小枝とかゴミを取り除き、米ぬかをかけその上に水をかけます。これを何回か繰り返し約1年間をかけて発酵をすすめて堆肥化します。落ち葉をミミズなどの虫や微生物が長時間かけ分解し、葉がくずれて土のように変化した堆肥の一種になります。こうしてできた落ち葉堆肥自体はあまり栄養分がありませんが、土と混ぜることにより土壌全体に微生物が増加し、葉が分解する際生成される養分で土壌が改善されていきます。土壌に「通気性」、「保肥性」、「保水性」が備えられることで結果として植物が育ちやすくなります。落ち葉堆肥にはカブトムシが多くあつまりますが、これは落ち葉堆肥がカブトムシの幼虫の餌になるからです。伊東さんはサツマイモとお茶の専業農家ですが、化学肥料を使って固い土壌で野菜を栽培する農業と違いふわふわの土壌で育った野菜は本当においしいと語っていました。

この地域の伝統農業は2017年に日本農業遺産に認定されました。今、三芳町に本部を置く「世界農業遺産推進協議会」を中心に世界農業遺産認定に向けて活動が進んでいます。世界農業遺産はその土地の環境を生かした伝統的な農業・農法、生物多様性が守られた土地利用、農村文化、農村景観などを「地域システム」として一体的に維持保全し次世代に継承することを目的に国連の食料農業機関 (FAO) が立ち上げたプロジェクトです。現在世界農業遺産に認定された地域は新潟県の「トキと共生する佐渡の里山」や石川県の「能登の里山・里海」の他、9の地域が世界農業遺産に認定されています。

一方、地球温暖化の問題は地球規模で深刻な影響を与えています。昨年12月に開催されたCOP15では生物多様性について2030年までに達成すべき23項目が採択されました。世界自然保護基金によると過去約50年間で地球上の生物多様性の7割が失われ、今後10年で起こりうる最も深刻な脅威として多様性の喪失を、気候変動や異常気象に次ぐ3位に位置付けています。生物多様性を維持・保全しなければならない理由として「豊かな文化を育む」恵や、「環境を調整し暮らしを守る」恵を受けることにあります。生物多様性はそれぞれの地域で長い年月をかけ形づくられたことから地域ごとに独自性をもっておりそれぞれの地域で守る必要があります。我々が住む近辺の武蔵野の雑木林では、大量の産業廃棄物の焼却が行われ大量のダイオキシンが排出され、環境を悪化させてきた過去があります。

落ち葉掃きは雑木林の維持・保全に必要な活動で、そのことによって生物多様性の維持に必要なエコロジカルネットワーク(生物生息回廊)を作りだしています。

落ち葉堆肥農法は土を改良し、美味しい野菜を育み、生物多様性の維持に寄与し、雑木林は美しい景観を醸し出しています。この地域で継承されている落ち葉堆肥農法はまさに世界農業遺産にふさわしいと思います。一日も早い認定を願ってやみません。



国内の世界農業遺産認定地域(サイト)

